

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.27 SPRING 2012



嵯峨本方丈記（国文学研究資料館蔵）

目次

●メッセージ

国文学研究資料館創設40周年

創立40周年を迎えて	今西祐一郎	1
国文学研究資料館の40周年によせて	岡 雅彦	2
戸越時代の館長四代	松村 雄二	3

●研究ノート

藤原定家筆「新古今和歌集撰歌草稿」について	寺島 恒世	4
戦争記念碑は何を語るのか—忘れられた地域の記憶	加藤 聖文	6
役者絵『見立三十六歌撰』について—文学と歌舞伎から—	山下 則子	8

●トピックス

「北米日本古典籍所蔵機関ディレクトリ」の公開について	鈴木 淳	11
特別展示「鴨長明とその時代—『方丈記』800年記念」	小林 健二	12
平成24年度アーカイブズ・カレッジ(史料管理学研修会通算第58回)の開催		13
『HUMAN——知の森へのいざない』第2号		13
総研大日本文学研究専攻の近況		14

創立40周年を迎えて

今西 祐一郎（国文学研究資料館館長）

昭和47年（1972）、品川区戸越の地に誕生した国文学研究資料館は、平成24年（2012）の本年、創立40周年を迎えます。その間、館の基幹事業である、全国各地に所蔵される国文学関連資料の調査とそのマイクロフィルムの収集活動は、各地域在住の研究者の協力を得て、すでに186万点、4万リールに及んでいます。そして、所蔵者・所蔵機関の協力によるマイクロフィルムの紙焼き製本版も7万5千冊を越え、研究者に貴重な資源を提供しているところです。

また、日本文学に関する参考図書、研究書（16万冊）、雑誌、研究機関の紀要等の刊行物（8千誌）の備えも、日本一の規模を誇り、国内のみならず、海外の日本文学研究者からも日本文学研究の拠点として認められています。

ところで、古典籍原本の収集は、上記の調査・マイクロフィルム収集を主たる事業とする国文学研究資料館としては主要業務ではなく、したがってそのための予算措置も講じられていません。しかし、古典学にとって原本の収集・所蔵はやはり欠かすことは出来ません。館では従来、経常経費をやりくりして細々と原本収集につとめる一方、外部の研究者、蔵書家から貴重な資料を寄託していただいたり、寄贈していただくことによって、その欠を補ってきました。昨年度は、田安德川家の「田藩文庫」850点、佐渡の鶴飼文庫1,350点の寄贈を受け、当館の和古書の所蔵も一段と充実してきました。

この40年間は、しかし、時代の流れにつれて、様々な対応や変身を求められた40年でもありました。たとえば、技術のめざましい進歩による資料の電子情報化、国際交流の促進、総合研究大学院大学への参加による大学院の設置、国立大学法人化に連動した大学共同利用機関の法人化、そして、何よりも当館にとっては大問題であった立川移転などです。

それぞれの問題については、その節目節目にいろいろな議論が交わされたと聞き及んでいます。今日、そのいずれもが過不足なく機能しているのは、歴代の館長以下、教職員の方々の先見の明と努力の賜物だと感謝の念にたえません。

移転5年目を迎える立川の新施設の概要については、これまで「国文研ニュース」などでご紹介してきたとおりです。館創立40周年の今年は、鴨長明の『方丈記』が書かれてから800年にあたる年でもあります。館では中世文学会の協力を得て、来る5月25日より、創立40周年記念の特別展示「鴨長明とその時代—『方丈記』800年記念」を開催いたします。多数のご来場をお願いするとともに、本年も国文学研究資料館に対するご支援・ご鞭撻をお願い申し上げます。



国文学研究資料館の40周年によせて

岡 雅彦（国文学研究資料館元企画調整官）

国文学研究資料館が今年で創設40周年を迎えるという。40年というときほど長い年月とは思えないが、創設時から関わったものにとっては、国文学研究資料館の今日の充実ぶりを見ると、今昔の感に堪えない。

私は創設の翌年の昭和48年に着任したが、戸越の旧三井文庫の敷地には新築の東館は完成まじかで、管理部と文献資料部、研究情報部及び史料館のスタッフは手前の旧史料館の書庫の1～3階の雑然としたスペースの中で仕事をしていた。

北側の門をはいってすぐ右に白壁の石造りの書庫が2棟、その奥に木造平屋の史料館、その左に池を背にして建築中の西館、その東に東館、手前に3階建ての史料館の古びた書庫といった配置で、雨模様の夕方は大きな蝦蟇ガエルが何匹となくわれわれの歩行の邪魔をしたものである。

国文学研究資料館の基本的業務である、古典籍資料の調査、収集、閲覧は時間を積み重ねないとその効果が発揮できないもので、当初はまさに零からの出発で、大型のコンピュータも早くから導入されたが、からの大型ジャンボを飛ばしているという陰口もたたかれた時代であった。

創設から40年、資料館は多くの関係者の努力によって格段の飛躍を遂げた。今では大学の研究者や大学院生は何か調べものがある場合、まず資料館のマイクロ目録と古典籍総合目録で検索するのが当たり前となっている。

資料館の40周年にあたり、2、3の希望を述べておきたい。それは資料館の設置目的の資料の調査収集保存の基本的部分の問題である。

資料館は全国の図書館・文庫の蔵書目録をもとに古典籍の調査と収集を行ってきた。出来るだけ早い時期に研究者への資料提供をすべく、利用頻度の高いと予想される名の通った作品を中心に調査収集を行ってきた。図書館により事情は異なるが、めばしい資料の調査がひと渡り終わった段階で、もとに戻って残りの調査を進めてきたわけだが、悉皆調査の済んだ文庫は現在どれほどあるのだろうか。調査の許される図書館・文庫の蔵書を悉皆調査することが資料館の使命であることを関係者の方々は肝に銘じていた

だきたい。

近年予算が少ないので和刻本の調査を制限しているとの噂を聞いた。予算配分の問題は部外者の口出しする問題ではないが、和刻本は日本、中国、朝鮮の書物の交流だけでなく文化全体の影響関係を考察するうえで欠かせない資料であるので、和刻本も和本同様悉皆調査を旨としていただきたい。日本で著作されたり出版されたあらゆる古典籍を悉皆調査してそのデータを研究者に提供すること、また悉皆調査に対応した悉皆収集は無理であろうが、必要に応じた画像の提供も時間はかかるであろうが、地道に積み重ねていていただきたい。資料館の基本的なデータベースであるマイクロ／デジタル資料・和古書所蔵目録と日本古典籍総合目録は私も毎日のように開いて利用している。国際的にも重要なデータベースなので、さらなる充実を期待している。

最後に、資料館の調査体勢について。資料館は毎年、古典籍の調査員と特別調査員を、国文学研究者を中心とする大学研究者、併せて150名ほどにお願いして、調査を進めている。この制度は初代館長の市古貞次先生の案と思われるが、資料館にとっても、調査員の先生方にとっても大変重要な意味を持つ。我々研究者は自分の研究分野の資料を見るのに時間をかけてしまい、当面関わりのない資料は後に回す傾向が強い。しかし、古典籍資料についてのさまざまな判定は専門の狭い範囲の資料を見ているだけでは駄目で、さまざまな分野の資料を幅広く見ることで、その判定能力は高まるものである。これは日常的経験の積み重ねが望ましい。この制度のおかげで、年に150人ほどの研究者は自己訓練が可能になり、判定能力が高まるとともに、資料館は質の高い調査カードを入手することが出来るわけである。今の資料館は、専門以外の資料でも楽しみながら調査する、本好きの先生方に支えられている。我が国には古典籍資料が豊かに残る。これらを震災等で無に帰させてはならない。それは一途に調査員の先生方の肩にかかっている。次の40年後の資料館の姿を想像すると楽しくなる。

戸越時代の館長四代

松村 雄二（国文学研究資料館元副館長）

国文学研究資料館設立の話をきいたのは、大学闘争の渦が巻いていた大学院博士課程在学中のこと。当時はその種の国の組織に縁が繋がることになろうとはついぞ思いも寄らなかった。卒業後、都立高と女子短大に十数年を過ごしていたら、平成二年、当時の小山弘志館長から思いもかけず声がかかり、翌年から戸越にあった資料館へ移ることになった。私が国立機関に転ずると知って、同僚だったうるさ型の百目鬼恭三郎氏から、沈没する舟から逃げ出す鼠だと笑われた。またある日、行きつけの小料理屋に入ったら、当時の文献資料部のお歴々が近くの席で歓談していて、今度なんとかというのが資料館に来るらしいが、誰か知っているかなどと私の噂をしているのが聞こえてきて、ニヤニヤ聴いていたというハプニングもあった。

同期で入ったのが、整理閲覧部へ所属した鈴木淳氏。私は研究情報部に配属された。開設当初からの悲願であった「国文学論文目録データベース」の公開を翌年に控えており、新井栄蔵部長のもと、一種の臨戦態勢の中にあった。その辺の経緯は割愛せざるをえないが、とにかく公開してから数年、中村康夫さんと一緒に北海道から九州まで、各地の大学にデモンストレーションの全国行脚を繰り返したことを思い出す。

国文研では四人の館長に従った。二代小山館長の最後と、三代佐竹昭広、四代松野陽一、五代目伊井春樹の各館長四人である。国文研は初代と二代目館長が東大で、次もそうだろうと思っていたら京大出身の佐竹氏が就いたのでびっくりした。小山館長は新しいことをあまりしなかったが、京都から新井さんに次いで佐竹さんを招聘したことは小山館長の快挙だといっている。

三代目の佐竹館長が打ち出した、地元区民に対して館の事業内容を一週間に亘って公開した一種の文化祭の試み、大学院学生を対象に行った夏季原典購読セミナーと、平凡社や臨川書店からの講義録の出版などは、大いに賛同できた。資料館をもっと世に知らしめようとして打ち出した初めての動きであったといえるのか。次の館長に初めて私学出身の松野陽一さんを起用したことも佐竹館長の快挙であった。私学の研究者が資料館創設に当たって並々ならぬ支援を惜しまなかったにもかかわらず、結局お役所仕事の常で、

官学の研究者がトップに位置してきた慣例を破り、思い切った風穴を開けたからである。

松野館長時代に二つの大展開があった。平成十五年、それまで毎年のように先送りしてきた総合研究大学院大学への参加について踏みきったこと、その翌年、歴博・民博・日文研といった他の大学共同利用機関と共に人間文化研究機構に加わったことである。国文学という体質からそれまで時代に対して我関せず焉的に生きてきた国文研にとっては、鎖国から一挙に開国に飛び込んだようなものであった。松野館長とその後を継いだ伊井館長の時代に向け、種々の組織改革に悪戦苦闘した後手に回りがちの未知の経験また経験であったが、残念ながらこれも詳しく書く余裕がない。私も両館長や当時の岡雅彦企画調整官とともに、各機関との調整で東奔西走の忙しさを味わった。

資料館は設立の趣旨からいって、何といっても調査収集担当の文献資料部が花形であり、整理閲覧部や研究情報部、歴史資料館の他の三部署はとかく脇役の悲哀を味わっていた。私は途中からの入館で怖いものもなかったし、縦割り組織の独善性や権利意識が全館的一体性を疎外することを知っていたから、アフターファイブには文献資料部や管理部の人たちとも臆面なく付き合ったし、組合にもすぐに加入し、横断的に催された読書会などにも参加、部という垣根を越えてかなり自由に交流して廻った。もし私に功績というものがあるとしたら、そうした部間相互の自由な交流を促進したことにあるかもしれない。

三十周年は松野陽一館長の時代、品川戸越の地でこじんまりやった覚えがあるが、あれからもう十年たつ。新しく移った立川をたまに訪れるが、広くなったせいか業務がさらに厳しくなったせいか、いつ行っても、館員が気むずかしい顔をして引き籠もっている感じがする。東日本大震災後、絆ということがしきりに叫ばれているけれども、絆は外に対してだけあればいいというものでもない。戸越時代の記憶ついでに、将来も元氣な資料館であり続けてほしいと願う、一ロートルからのひそやかな期待である。

藤原定家筆「新古今和歌集撰歌草稿」について

寺島 恒世（国文学研究資料館教授）

標記の資料は、『新古今和歌集』の編纂過程における草稿と考えられる断簡である。図版によってその存在は知られながら、原典は所在不明であったが、平成 22 年 5 月、大阪古典会主催の古典籍展観入札会に出品され（『中尾堅一郎氏追悼古典籍善本展観図録』所載）、斯界の耳目を集めた。幸い本断簡は当館に収蔵されることとなったので、ここにその概要を、研究史に占める意義に触れつつ、簡略に紹介したい。

書誌は、縦 27.6 × 横 38.4cm、料紙は楮紙、軸装され軸頭は象牙、箱入りである。箱も箱書きも簡素で、極め札等はなく、伝来をうかがわせる手かかりは有さない。やや虫損があり、擦り消ちの跡も複数箇所認められる。

当該資料は、早く鹿嶋（堀部）正二氏「藤原定家自筆の撰集草稿断簡に就いて（上）」（『清閑』第四冊、昭和 13 年 10 月）により学界に紹介された。本論において氏は、大正 14 年 12 月の東京美術倶楽部における「渋柿庵蔵品入札」売立目録中の「定家歌切」を写真とともに紹介され、検討を加えられて、「新古今集撰進の第一期における定家の歌稿」と認定された。その後、久保田淳氏、佐藤恒雄氏がそれぞれ別個に取り上げられ、「定家の新古今のための撰歌の手控えの稿本」（久保田氏「新古今前後研究断片（三）」『和歌史研究会会報』第 33 号、昭和 44 年 3 月）、「新古今集撰集第一期の定家に

よる撰者進覧本の草稿」（佐藤氏「定家進覧本の形態と方法」『藤原定家研究』第四章第一節、平成 13 年 5 月、初出は昭和 55 年 9 月）と、同様の結論を導かれている。

『新古今和歌集』は、周知のように、建仁元年に撰集の下命を受けた藤原定家等複数の撰者が、下命者後鳥羽院とともに編纂作業に当たった勅撰集であり、その過程

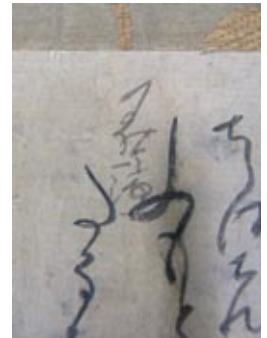


図2

は、撰者達による撰歌（第一期）、後鳥羽院による精選（第二期）、撰者達による部類分け（第三期）、後鳥羽院による切り継ぎ（第四期）と、通常の勅撰集とは異なる経緯を辿った。本資料の成立が想定される第一期の撰歌段階は、建仁元年（1201）11 月から建仁 3 年（1203）4 月に至る時期である。

本断簡が有する価値の高さは、上記のうち特に佐藤恒雄氏の研究により認定された。氏はツレと認められた同種の断簡二葉（思文閣墨跡資料目録所載「藤原定家七首和歌抄写断簡」・井上子爵家並某家所蔵品入札目録所載「定家和歌五首」）と併せ、「撰者進覧本の草稿」である可能性が高く、その撰集過程の具体的な様相を窺わせる資料であることを論じ

られた。すなわち、「撰集作業は、採歌と配列を、別時に、別作業として行うのではなく」、「同時並行的に進行させてゆくという、極めて原始的な方法によるもの」であり、「一見非能率的」ながら「同じ詞書や作者名を何度も書く必要はなく、ある面では合理的、能率的で、かつ正確でもあった」ことを説かれた。また、作者においても「八条院高倉」・「海慧」の新出歌が存することから、前者につき、「六百番歌合後番女房百首」のメンバーに新たに追加できること、後者につき、九条家や御子左家の仏事に深く関わった僧侶として「縁故」による追加であることをそれぞれ明かされた。因みに海慧は、現在の勅撰集には入集が認められない人物である。

全文を翻刻すれば、次頁の通りである（便宜、和歌に通し番号を付し、その出典を示す）。

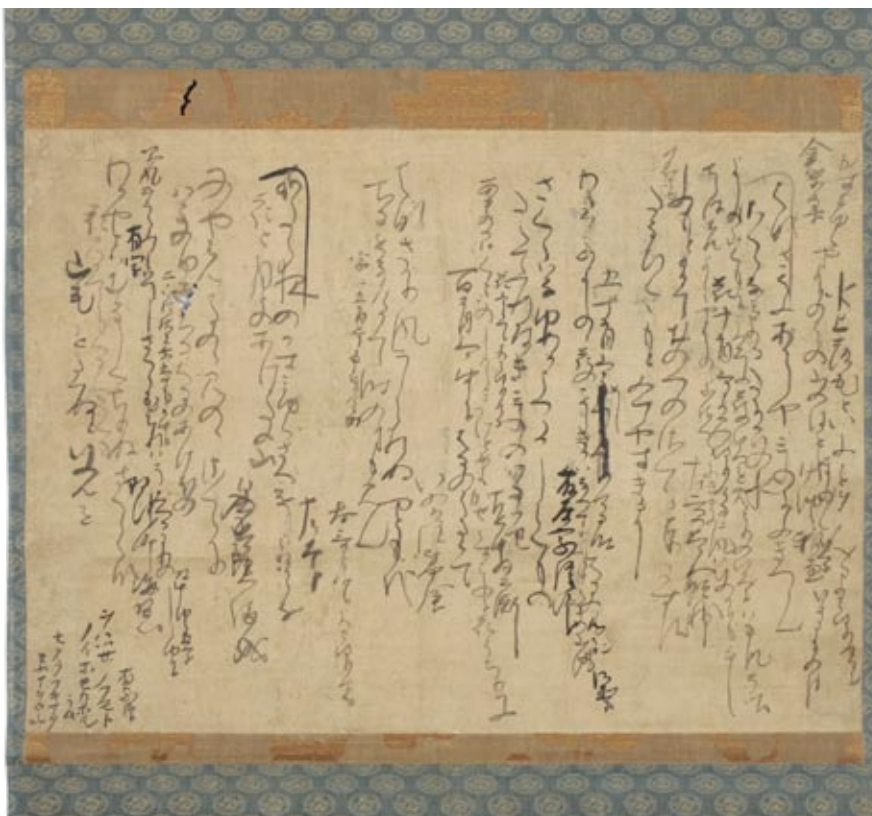


図1

- 水上落花といふことヲ人へよみ侍りけるに
- 1 かすみゆくやよひのそらの山のはをほのへいつるいさよひの月
金葉集 中納言雅兼
- 2 はなさそふあらしやみねにふきつらん
さくらなみよるたにかはの水
- 3 よしの山くもにうつろふ花のいろをみとりのいろにはる風ぞ吹
花十首哥よみ侍りけるに
- 4 ちらはちれよしやよしの山さくらふきまふ風はいふかひもなし
左京大夫顕輔
- 5 ふもとまておのへのさくらちりこすは
可在^上浄 たなひくもとみてやすきまし
五十首哥^{たてまつり}ける時はるの心を 御製
- 6 わきてこのよしの花のをしきかはなへてそつらきはるの山風
藤原家隆朝臣
- 7 さくらはなゆめかうつかしらくもの
たえてつれなきみねのはるかせ
花哥とてよみ侍りける 左近中将公衡
- 8 あまのかはくものしからみかけとめよかせこすみねに花そちりかふ
百首哥中^{はる}のうたとて
八条院高倉
- 9 はなさかり風にしられぬやとも哉
ちるをなけかて時のまもみん
家に五首哥よみ侍りける時 春哥とてよみ侍りける
左大臣
- 10 あたら夜のかすみゆくさへをしきかな
花と月とのあけかたの山
入道俊成(注)
- 11 又やみんかたのみのさくらかり
はなのゆきちるはるのあけほの
二品法親王家五十首か中に 権中納言兼宗
- 12 吹風ヲうらみもはてしさくら花ちれはそみつるにわのしらゆき
有家 権律師海慧
- 13 わかやとはむなくちりぬさくらはな
花見かてらもくる人そくる 有家朝臣
山花をたつぬといふ心を 14 ヲハツセノフモト
ノイホモカホル
ラム
サクラフキマク
ミヤマヲロシ
ニ
- 1 千五百番歌合・春四・二四一番左勝。
女房(後鳥羽院)。
- 2 金葉集・春・六〇。
- 3 千五百番歌合・春三・一九六番左勝。
女房(後鳥羽院)。
- 4 千五百番歌合・春三・二一一番左勝。
女房(後鳥羽院)。
- 5 新古今集・春下・一二四。定家八代抄。
- 6 老若五十首歌合・四三番右勝。後鳥羽院。
- 7 老若五十首歌合・三九番左勝。新古今集・春下・一三九。
- 8 公衡百首・一二。
- 9 新出歌。(建久六年二月良経家女房百首か)
- 10 建久六年二月良経家五首歌。
- 11 建久六年二月良経家五首歌。新古今集・春下・一一四。
- 12 御室五十首・二〇八。
- 13 新出歌。(建久六年二月良経家五首歌か)
- 14 御室五十首・四五八。

(注)「入道」の部分は重ね書き。存疑ながら、当初「皇大夫」と書かれ、「大」が「太」に訂されたのち、その三字分に「入道」と重ね書きされたかと見られる。

全体で14首の歌が記され、それらは、2・5・7・9・10・11・13の7首が先に書かれ、後から1・3・4・6・8・12・14の7首が細字で書き込まれている。末尾の14の歌は左下隅余白に片仮名で記され、2と10の歌には除棄のための鉤点が付される。

従来の研究では、写真図版の不鮮明さにより翻刻には揺れが見られ、特に13の歌の後半は墨が薄く、判読は困難であった。この部分は「花見かてらもくる人ぞくる」と読まれる。これは前述の海慧が詠んだ歌で、『古今和歌集』の「わが宿の花見かてらに来る人は散りなむのちぞ恋しかるべき」(春上・凡河内躬恒・67)を本歌とする。その表現は通常とはやや異質であり、今後の検討が必要となる。

また、5の歌には、上部に注記と思しき記述がある(図1右上。墨色は2の歌に付される「金葉集」と同じ)。この箇所はこれまで検討されることがなく、原本に向かってもなかなか判読は困難である。何文字かさえ分かりにくい、熟視すると、「可在^上浄」と読むことができそうであ

る(図2参照)。すなわち、はじめの二字は「可在」、続く部分は「上」と「一」の割注の形による小書き、最後の一字は「浄」と読まれ、「上一」「浄」に在るべし、と読み下される。「浄」は「浄書本」の略、それを修飾する「上一」も、「上～下」と数字を組み合わせた編集作業中の分類を示す略称ではなかろうか。もとより憶測ながら、当該歌のある段階の浄書本における存否に関する注記の可能性が高い。とすれば、本断簡が浄書本に対する草稿であることを明示する証ということになる。因みに5の歌は新古今入集歌であり、浄書本には存した筈である。

なお、この断簡から得られる撰歌基準や歌人評価に関する新たな知見については、九州大学韓国研究センター・当館・高麗大学校日本研究センター共同主催「Seoul 発 日本学(国際研究集会 in Seoul)」(2011年7月18日、於:高麗大同センター)、及び国文研フォーラム(2011年11月2日、於:当館)で口頭発表をした。その具体的な内容は、本年度の当館出版物に掲載予定である。

本資料は、「新古今和歌集撰歌草稿」として、当館貴重書(請求記号99:16)に分類されている。『新古今和歌集』編纂の実態を解明する新たな手がかりを少なからず蔵する資料に違いなく、種々の角度からの検討が望まれる。

戦争記念碑は何を語るのかー忘れられた地域の記憶

加藤 聖文 (国文学研究資料館助教)

戦争記念碑が持つ意味

現代の私たちにとって、戦争記念碑は日常生活のなかで意識されることはないであろう。しかし、戦争記念碑は日ごろ気づかないだけで意外と身近なところに数多く存在する。自分が住んでいる地域の神社や学校の脇などにそれは今もひっそりと建っており、意識して探してみると驚くほど多くの戦争記念碑を私たちは「発見」するであろう。なかでも神社は戦争記念碑だけでなく、玉垣から拝殿内の絵馬に至るまで、以外と近代以降のものが多く、地域社会と戦争との関係を知る上で、宝庫ともいえるものが多い。

これらの戦争記念碑は、忘れ去られた過去の遺物ではない。諸外国においては現在でもなお、戦争記念碑は単なる国威発揚だけではなく、国民統合の象徴でもある。私たちは今の社会が有史以前からある所与のものにとらえがちであるが、実際は明治以降に人工的に形作られてきたものである。近代国民国家は、日本に限らずいづこの国でも同じように人工的なものであって、国民意識を確立しそれを統合することは国家の維持にとって必要不可欠であり、とりわけ戦争と教育は今でも重要な役割を果たしている。

日本でも戦争は、戦前まで国民国家形成と表裏一体の関係にあった。戦争記念碑には明治になってから進められた国民国家の形成に重要な役割を果たした戦争に従軍し、戦死した人びとの名前が刻み込まれている。そして、それらの記念碑は、戦争によって国民国家へと組み込まれていった地域社会のすがたをあらわす貴重な記録でもある。

日本も含めてどこの国でも従軍者や戦死者の記録は、政府行政機関が作成した公文書として残される。とはいえ、記録がすべて残されているわけではなく、地域差や時代差があつて、完全に残されていることのほうが珍しい。さらに、公文書館がないようなところでは、こうした記録を見ることができない。こうした現状を踏まえると、地域社会と戦争との関係を明らかにし、地域の近現代史を考えるためには、戦争記念碑が重要な意味を持つてくるのである。

戦争記念碑の歴史

さて、戦争記念碑は、その起源を戊辰戦争にもとめることができるが、地域社会に広まるのは西南戦争を切っ掛け



飢肥招魂社

とする。さらに、建立が全国各地に広まり、より地域に深く根ざすようになるのは、日本が始めて行った対外戦争である日清戦争を契機としてである。その後、従軍者と戦死者が激増した日露戦争によって、全国的に戦争記念碑は激増する。日露戦争後の戦争記念碑は、一般的には忠魂碑といわれるようになるが、それ以前は従軍記念碑であったり、招魂碑、表忠碑などさまざまな名称が付けられており、形態も地域によって異なり、個性的なものも多い。その後、日中戦争の頃から忠霊塔が全国的に建立されるようになる。これは、これまでの戦争記念碑と異なり、戦没者の遺骨を収納できるもので、巨大な納骨堂のようなものである。こまでくると大きさは千差万別とはいえ、基本的な構造と形態は画一化されてしまう。

敗戦は、戦争記念碑のあり方に大きな影響を及ぼした。GHQは軍国主義的建造物や行事を禁止する。この禁止令は軍国主義的なものだけに限定し、戦争記念碑すべてを対象としたものではなかったが、禁止対象が曖昧であったため、全国的に過剰ともいえる反応を引き起こし、戦争記念碑を破却したり、埋め立てるなどといった事態が頻発した。その一方で、忠霊塔のような巨大建造物などは「忠霊塔」のプレートだけ「慰霊塔」や「平和之塔」に取り替えて表面的な対策をとったケースも多く見られた。例えば、小樽市には戦前まで戦没者を対象とした「昭忠碑」という巨大な慰霊塔があったが、戦後になって「郷土小樽市に貢献のあった人々を合祀」して「顕誠塔」と名称を替えて現在も存続していることは好例であろう。

このように占領期に戦争記念碑の破却や読み替えが起こり、サンフランシスコ講和条約発効によって日本が独立すると、各地で戦争記念碑建立のラッシュともいえる現象が起こる。ここには、破却や埋め立てられた記念碑の再建や掘り起こしも含まれる。そして、戦後の戦争記念碑の形態や表記は戦前以上に千差万別となり、しかも大型化するとともに、「平和」や「慰霊」が前面に出されるのが特徴である。それにとともに、記念碑の対象が特定の地域の戦死者に限らず抽象化するケースも現れる。例えば、熊本県護国神社にある「満洲殉難碑」は、敗戦後の混乱期に満洲で命を落とした人びとを対象とした慰霊碑であるが、そこには日本人だけでなく中国人やモンゴル人・朝鮮人、さらには侵攻した側であるソ連人も対象に含めている。こうした対象の拡大も戦後の大きな特徴であるが、逆にそれが故に対象が抽象化してしまい、何を目的に建立しているのか曖昧になるケースも多くなっている。

近代の地域社会を戦争記念碑から読み解く

戦争記念碑の起源は、幕末に遡ることができる。これは、招魂社の建立と深いつながりを持ち、古いものでは、長州藩内で禁門の変の戦死者墓地として作られた小郡招魂社や吉田松陰や奇兵隊士らを祀った下関の桜山神社招魂場などが挙げられる。長州藩で始まったこうした戦死者祭祀のかたちが戊辰戦争を機に、官軍に参加した各藩に伝播し、招魂社とセットになって記念碑も建立されるようになった。そして、この招魂社が後に靖国神社へと繋がる。このような歴史的経緯から明らかなように、招魂社（のちの靖国神社と地方に建てられた護国神社へと発展）は、近代国家形成に貢献した官軍戦死者を対象としたものであって、賊軍の戦死者は慰霊の対象ではなかった。

しかし、私が調査を行った宮崎県日南市にある飢肥招魂社は、全国的にも珍しい部類に入る。飢肥招魂社は飢肥藩歴代藩主の墓地と五百異神社（明治までは藩主伊東家の菩提寺であったが、廃仏毀釈によって神社となる）を見下ろす台地にある。招魂社の敷地内には祠の他に、西南戦争・日清戦争・日露戦争・日中戦争・太平洋戦争の各戦争ごとの戦没者の墓と忠霊塔があり、まさに明治以降の日本の戦争を凝縮したような空間であり、名称は招魂社であるが、桜山神社と同じように実際は戦死者墓地である。そして、この招魂社は西南戦争を起源としているが、祀られている対象

は、官軍ではなく薩軍の戦死者である。飢肥では西南戦争の際、新政府に出仕していたものも含めて旧飢肥藩士の多くが薩軍に参加した。彼らの多くは戦死、または獄死したが、西南戦争終結からまもなくしてこの地に改葬されたのである。戊辰戦争の時も同様であるが、賊軍の戦死者に対する明治政府の取り扱いはきわめて冷淡であって、棄て置かれた末、遺骨が集められて埋葬され、塚（いわゆる合葬墓）が築かれるのが一般的であった。しかし、飢肥の場合、改葬された一人一人の墓が建立され、しかも招魂社に祀られ、その後の対外戦争で戦死した飢肥出身者はこの地で祀られていったのである。いわば飢肥招魂社は、全国的にも珍しく賊軍墓地を主体として発展したものであった。

靖国神社や戦死者を扱う研究では、靖国神社を頂点として地方の護国神社や招魂社、さらには忠魂碑や忠霊塔のような戦争記念碑を通して、国家が戦死者を殉国者と位置づけながら統制し、彼らの祭祀の主催者が天皇であると位置づけがちであるが、実態はそれほど単純ではなく、中央が考えていることと、地方がそれをどう受け止めるかは別の次元である。むしろ、それぞれの地域はそれぞれの事情や利害に応じて、時には中央と妥協し、時には協調、または表面的に服従しつつ自己の要求を実現しようとしていたとらえるべきであろう。

また、内務省が戦死者の慰霊的要素の強い戦争記念碑を神社の境内に建立してはならないと各地方に対して通達したにもかかわらず、実際には神社境内に戦争記念碑は数多く建立されている。戦争記念碑は本質的には戦死者の慰霊碑であるが、興味深いことに、戦争記念碑が寺に建立されているケースは少なく、神社や学校、役場といった公共空間に建てられるケースが圧倒的に多い。同じ宗教施設であってより慰霊にふさわしいはずの寺では無く、内務省が禁じた神社に建てられている事実は、地域社会において神社はどのように位置づけられているか解明する糸口にもなり、また、中央集権体制が確立した近代日本のなかでも中央と地方の一方的ではない複雑な関係を読み取ることができよう。

このように、戦争記念碑は近代以降の地位社会の変容を解明するさまざまな糸口を私たちに与えてくれる貴重な記録なのである。

役者絵『見立三十六歌撰』について—文学と歌舞伎から—

山下 則子 (国文学研究資料館教授)

見立とは、ある共通する一点から全く違うものを連想する、謎解きの要素のある手法で、近世には多く見られます。以前は「当世化」である「やつし」の手法との違いに特化して研究しましたが、今回は「近世的表現様式」の中の一つの手法として研究しています。

『見立三十六歌撰』は揃い物役者見立絵で、三代目歌川豊国画、嘉永5年(1852)9～11月改印、江戸伊勢屋兼吉から版行されたものです。町田市国際版画美術館蔵の全36枚は、状態も大変良いものです。36歌仙の和歌が歌人の名前とともに書かれ、その和歌のある部分から見立てられた役者絵が描かれます。その役の名前は書かれますが、これを演じている歌舞伎役者の名前は書かれていません。似顔や衣装等の役者を表す模様から、誰であるかを推測します。『見立三十六歌撰』は、物故役者やその役を演じたことがない役者でも、その役柄にふさわしい役者を見立てて描いています。

『見立三十六歌撰』は、和歌のある部分をその役に見立てるといふ、和歌から見立てを解く作品なので、和歌の内容を正しく知る必要があります。柿本人丸(江戸時代は人麻呂ではなく人丸)の和歌とされている「ほのぼのと明石の浦の朝霧に嶋かくれゆく舟をしそ思ふ」を松浦佐用姫に見立てている作品(図①)の場合、この和歌は『古今集』



図①：町田市国際版画美術館蔵

の仮名序と「羈旅歌」の部に伝人麻呂とされる詠み人知らずの歌です。しかし『古今集』以後人麻呂作とされ、藤原俊成や36歌仙を選んだ藤原公任も人麻呂の歌として絶賛し、人麻呂信仰と相俟って歌の手本とされました。和歌の意味は、「ほんのりと明るんでいく明石の浦、その明石の浦に立ちこめる朝霧の中を、嶋隠れに行く舟をしみじみと感慨深く思っていることよ」となります。松浦佐用姫とは、恋人が異国へ出征するのを悲しみ、山に登って恋人に領布を振った伝説上の女性のことで、和歌の中の舟を、松浦佐用姫の恋人が乗る舟と見立てたものです。松浦佐用姫伝説の文学への登場は、『万葉集』巻五の山上憶良の歌「遠つ人 松浦佐用姫 つまごひに 領巾振りしより負へる山の名」などが早く、その恋人は大伴佐提比古とされています。『曾我物語』や『太平記』にも引用され、謡曲の番外曲『松浦』(世阿弥作か)にも劇化されますが、江戸時代の作品には少なく、元文5年(1740)9月大坂豊竹座初演浄瑠璃『武烈天皇艤』(為永太郎兵衛作)に佐用姫が石になった伝説が用いられていますが、歌舞伎で演じられた記録はありません。つまりこれは、歌舞伎ではなく曲亭馬琴作読本『松浦佐用媛石魂録』(前編文化5年・1808・刊、後編文政11年・1828・刊、天保頃重版)を基にしたと思われます。読本の口絵には、平安風俗で描かれた佐用姫と、本文挿絵に肥前松浦郡の浪人の妾玉嶋が、北条時頼に召された夫との別れを悲しみ、松によじ登って舟を見送る様子が描かれています。読本の歌川豊広画の挿絵は、本図のように石を抱いて沖を眺める構図ではなく名前も異なるので、読本から直接取材したとは考えられません。この絵は「ほのぼのと」の和歌を、よく知られた松浦佐用姫に見立てる、という「見立て」の巧妙さを見せることに主な目的があり、松浦佐用姫を美貌でしとやかで2ヶ月前の7月に歌舞伎『自雷也豪傑譚話』で大当たりを取った3代目岩井桑三郎に見立てて描いた作品と思われます。

ところで近世期に流布した一首歌仙本形態の36人歌合の歌は、ほとんどが「歌仙抄」型(下河辺長流・万治2年・1659・成立)と指摘されています。『歌仙抄』には、歌人の略歴や歌意も書かれ、「ほのぼのと」歌の解釈の後に「此うたは柿本人丸もろこしにわたりたまふ時、此所を過るとてよみ給へる也。しかるを此舟をしそ思ふといへるは、余所の舟のはるかに浦わたりするを、霧のひまよりなかめやりてよめるやうになへて申ならはせり。これことのほかの誤なり。…我かのれる舟の行衛しらぬを思ふにてこそ旅のうた

には侍れ…」とあります。つまり『歌仙抄』は世間で解釈されている、霧の間から遠くに見える余所の舟が島の陰に隠れる様子を眺めて詠んだ歌ではなく、人麻呂が自分の乗っている舟のことを詠んだものと解釈しているのです。36 歌仙の絵入り版本『哥仙金玉抄』（京都金屋半右衛門板、坂内山雲子著、吉田半兵衛画か、天和3年・1683・刊）は、『歌仙抄』からほぼそのまま引用した和歌注釈、作者略伝、36 歌仙を歌合わせのように左右に分けてその代表歌を散らし書きにし、残り四首を「書き換え歌」として列挙する作品です。『歌仙抄』に忠実な絵本なので、この人麻呂歌には、『歌仙抄』の内容に即して歌人が舟に乗った歌意図(図



図②：東京芸術大学附属図書館蔵

②) が描かれています。京都で『哥仙金玉抄』が刊行された翌年の貞享元年(1684)に、江戸の松会板『哥仙金玉抄』が刊行されます。この松会版にはよくあることですが、上下2冊であった上方版の『哥仙金玉抄』を3巻3冊に改刻し、本文はそのままながら、見開きで一人の歌仙とその歌が見られるように構成し、歌仙絵・歌意図ともに描き直されました。この「ほのぼのと〜」も、本文は『歌仙抄』のように自分が乗った舟であるとしながらも、挿絵は遠くの舟が島の陰に隠れる様子を描いています(図③)。



図③：個人蔵

もし『見立三十六歌撰』の「ほのぼのと〜」の見立てを考える時に、松会版『哥仙金玉抄』を基にしながら和歌の意味や見立ての工夫、絵の背景などを考えたのだとすると、「歌仙抄」型の一首歌仙に拠つつも、松会版の歌意図の解釈の絵を描いていることに、つじつまは合うのです。(中略)

歌意図の転用例は、他にも認められます。『見立三十六歌撰』の猿丸大夫の和歌は「おちこちの たつきも知らぬ 山中に おぼつかなくも呼子鳥かな」です。これを「お俊伝兵衛」ものに登場する猿廻し与次郎に見立てています(図④)。和歌の意味は、「遠近の見当もつかない深いこの山中



図④：町田市国際版画美術館蔵

で、頼りなげに呼子鳥が鳴くのはたぐいなく物さびしいものだ」というもので、「呼子鳥」を、猿廻しの猿に見立てたものです。呼子鳥とは、古今三鳥の秘伝の一つであり、鎌倉時代後期に『古今和歌灌頂巻』に始めてその紹介がありつつも猿説は却下され、『古今和歌集灌頂口伝』で猿説は有力とされたと指摘されています。他にも『毘沙門堂本古今集注』所引賀茂重保説、能基系『古今和歌集聞書』、『日葡辞書』にも猿説は一説として紹介されています。しかしこの和歌の見立てが「呼子鳥→猿」であるという考えに確信が持てなかったのは、指摘されている資料が江戸時代庶民には縁遠いものに思われたからです。商品である浮世絵に、誰にも解けないような見立ては作らないと思うのです。『歌仙抄』ですら、「よふこ鳥は古今三鳥のその一つなれば、つたへをうけずはしるへからず。色々にいひをく説共みないたつらこと也。只春の時分、山ふかくなく鳥と先心得て置へし」とあり、『哥仙金玉抄』には「よぶこ鳥呼子鳥と書けり。古今三鳥のうち秘伝のものなれば伝をうけずしてはしるべからざるなり」とあり、「猿説」の拠ってきたところが解りませんでした。

ところが比較的最近「猿説」が林羅山の『徒然草』注釈書『野槌』に出てくることが解りました。つまり『徒然草』210段に、「喚子鳥は春のものなり」とばかり言ひて、如何なる鳥とも、さだかに記せる物なし。ある真言書の中に、喚子鳥鳴く時、招魂の法をばおこなふ次第あり。これは鶴なり。万葉集の長歌に、「霞立つ長き春日の」などつづけたり。鶴鳥も喚子鳥のことざまに通ひて聞ゆ」とある部分

の注釈です。『野槌』には、「喚子鳥稲負鳥百千鳥、是古今集の三鳥也。長谷川式部少輔守尚処にて常縁・宗祇・基綱の相伝の書を見侍しに、よぶこ鳥は人をも云猿をも云とあれと、猿と云がよきなりとするせり。近代の歌人此ことを秘して口外にいたさず。云々」とあります。長谷川守尚とは、長谷川権六ともいう長崎奉行になった人です。林羅山著の『野槌』は寛永後期(1640年頃)版行ですし、その後の『徒然草』注釈書に、羅山の注釈がそのまま踏襲されたり、『野槌』の整理縮刷版ともいべき注釈書『鉄槌』が版行されて、江戸期を通じて広く流布しましたから、呼子鳥=猿説は、江戸時代には『徒然草』注釈書によって比較的広く知られていたと思われます。そしてこの呼子鳥を見立てた猿廻し与次郎ですが、これは四代目市川小団次ですから、嘉永3年(1850)5月江戸中村座上演歌舞伎『猿廻門途の一颯』で演じた時のものです。そしてこの図の背景の深山幽谷ですが、上方版『哥仙金玉抄』では公家が山道を歩いている図(図⑤)が、松会版になって初めて深山幽谷が描かれたのです(図⑥)。加えて山の稜線は、



図⑤：東京芸術大学附属図書館蔵



図⑥：個人蔵

『見立三十六歌撰』の山の稜線と類似しているようにも思われます。但し『見立三十六歌撰』の背景の図が松会版『哥仙金玉抄』に類似すると、確定するのは難しいと思います。しかし松会版『哥仙金玉抄』の歌意図が後世に及ぼした影響については、より明らかな証明ができます。元禄7年(1694)に、江戸伊勢屋弥三郎板『哥仙大和抄』(伝本阿弥光悦書、画工未詳)は、36歌仙を左右に分けて代表歌を散らし書きにし、残り一首を「書き換え歌」として挙げ、作者略伝、『哥仙金玉抄』より抄録した和歌注釈が書かれます。そして歌意図は、江戸松会板『哥仙金玉抄』と類似するものが多いのです(図



図⑦：当館蔵

⑦)。これは2年後の元禄9年(1696)に、江戸須藤権兵衛より再刷りされているので、かなり売れたと思います。また、正徳4年(1714)刊『歌仙拾穂抄』(北村季吟著、画工未詳、板元未詳)の歌意図は、江戸松会板『哥仙金玉抄』の歌意図をそのまま改刻して利用したものです。面白いことに、猿丸太夫の歌は「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の～」の歌に変わりましたが、同じ挿絵を用いています(図⑧)。「歌仙拾穂抄」は宝暦6年(1756)に江戸藤木久市から再版されています。これ以降、歌意図入り36歌仙絵本が、新たに作られた例は見いだせません。恐らく歌意図入り36歌仙絵本として再版を重ね、松会版『哥仙金玉抄』、『哥仙大和抄』が近世期の36歌仙和歌の歌意図に一定のイメージを定着させていったと思われます。



図⑧：国立国会図書館蔵

『歌仙抄』本文と、延宝6年(1678)刊『百人一首像讃抄』の歌仙肖像図と歌意図を利用して、天和3年(1683)に京都で『哥仙金玉抄』が刊行され、翌年の貞享元年(1684)刊、江戸松会板『哥仙金玉抄』で歌意図が描き直されます。その歌意図は元禄7年(1694)刊の江戸板『哥仙大和抄』に利用され、正徳4年(1714)刊『歌仙拾穂抄』にも異なる歌にさえそのまま使われ、参照資料として嘉永5年(1852)の浮世絵『見立三十六歌撰』に利用されたのです。『見立三十六歌撰』がどの絵本を見たかを特定するのは難しいですが、松会板『哥仙金玉抄』を基とする和歌の歌意図を踏まえていることは確かです。このように『見立三十六歌撰』の見立ての解釈は、歌舞伎の面と文学の面の両方から考察を加えて、初めて解釈できるものであり、複合的な視点が生まれ、歌舞伎や文学の歴史を踏まえた深みと幅が生ずるのです。

図版掲載をご許可下さった各所蔵機関に御礼申し上げます。

「北米日本古典籍所蔵機関ディレクトリ」の公開について

「北米日本古典籍所蔵機関ディレクトリ」は、日本の古典籍である写本、板本の書籍や、地図、浮世絵などの一枚摺りを所蔵する北米(アメリカ合衆国、カナダ)の図書館、美術館等の所蔵機関についての情報を集約したものです。内容は、各所蔵機関について、住所、コンタクト・パーソン、資料の概数、コレクションの概要、閲覧の可否、複写の可否、目録の有無、その他の項目から構成されています。製作者は、東アジア図書館協議会(CEAL)の日本資料委員会の元に組織された日本古典籍小委員会(委員長マルラ俊江、森本英之、ロジャーソン久子、吉村玲子)で、同委員会が各所蔵機関に呼び掛けて得られた情報から成り立っています。二〇一一年の段階で、四十四機関の参加を得ており、合わせて約五万七千冊の書籍、約四万三千枚の一枚摺りを数えます。今後とも、参加機関をさらに拡大させていくことに努めて、将来は欧州の所蔵機関にも呼び掛けていく予定です。

本ディレクトリの維持、管理は、従来は日本古典籍小委員会が行ってきましたが、ユーザーの利便性を考慮し、より安定した運営を図るため、一昨年頃、国文学研究資料館でデータベースを維持管理するよう、日本古典籍小委員会より申し入れがありました。国文学研究資料館も、このディレクトリが持つ、日本研究の発展に寄与するであろう国際的意義に鑑み、これを受け容れ、その運用の大綱について、当館と日本資料委員会の間でお互いに理解を得ながら、公開に向けて準備を始めました。その後、古瀬蔵電子情報事業部長を中心に、公開システムに新たな工夫を加え、昨年末に当館のウェブサイトから発信することになりました。情報については各参加機関が責任を持つこととし、そのリニューアルについては、日本資料委員会と国文学研究資料館が、共同で収集と改訂に当たることとしました。また表記は、現在のところ英文だけの機関も少なくありませんが、各参加機関に呼び掛けながら、さらに日本語ページを充実させて行きたいと考えています。

北米に所在を移した日本の古典籍や絵画資料は、現在、その概要が明らかになっているだけでも莫大な数量に上ることが判明していて、中には、日本では確認できない貴重なものも少なくありません。本ディレクトリは、それらの在北米日本資料の概要を正確に伝え、研究者による利用に備えようとするものです。一方で、それらの資料については、米国の図書館員によって、OCLC WorldCat や国文学研究資料館の日本古典籍総合目録などのユニオンカタログによる同定作業を通じて、オンライン目録化が進められていて、研究環境は一段と進歩しつつあります。本ディレクトリの整備がさらに進められれば、近年、とみに盛んになっている日本人研究者による海外資料調査のさらなる促進が期待できることはもちろん、外国人による資料調査が活発化し、日本の古典籍資料を巡る学術交流がますます深まることも期待できそうです。(鈴木淳)

Directory of North American Collections of Old and Rare Japanese Books, Other Print Materials, and Manuscripts

北米日本古典籍所蔵機関ディレクトリ

Library of Congress (see from United States Congress Library) (see from United States Library of Congress)
Address Asian Division, L1 150, 101 Independence Ave., SE, Washington, D.C. 20540-4810, U.S.A.
Contact Person (Please replace the "[ATMARK]" with the symbol @ when e-mailing the contact person.)
<p>Edith Ito Reference Specialist, Asian Division Phone: 202-707-6054; Fax: 202-707-1724 E-mail: edit@ATHNAK.joc.gov</p> <p>Mari Nakahara Reference Specialist, Asian Division Phone: 202-707-2999; Fax: 202-707-1724 E-mail: maru@ATHNAK.joc.gov</p> <p>Kyoko Nigier Reference Specialist, Asian Division Phone: 202-707-6785; Fax: 202-707-1724 E-mail: knp@ATHNAK.joc.gov</p> <p>Heiko Rogerson Librarian, Acquisitions and Bibliographic Access Directorate, Asian and Middle Eastern Division Phone: 202-707-2296; Fax: 202-707-4586 E-mail: hrog@ATHNAK.joc.gov</p>
Collection Size Books: ca. 3,500 titles Manuscript books: ca. 2,200 titles Single-sheet items: 467 maps (Geography & Map), ca. 2,050 printed materials (Prints & Photographs)
Material Availability for Researchers' Viewing/Examination Available. The prospective user of rare materials should be engaged in serious research. The researcher is required to obtain an LC Reader Registration ID Card in LM 140 before visiting the Asian Reading Room. Request rare materials in the Asian Division and fill out the form "Library of Congress Reader's Registration for Use of Rare Materials" and sign the "Asian Reading Room Reader's Registration and Agreement to Comply with the Rules for Use of Rare Materials in the Library of Congress." Please contact the Asian Division for more information about our rare book policies.
Collection Description In 1905, Crosby Stuart Noyes, journalist and editor of the Washington Evening Star donated 658 illustrated books, including books from the mid-18th century to the late-19th century as well as watercolors, drawings, woodblock prints and lithographs. Single prints are now in the custody of the Prints and Photographs Division, while the illustrated books are kept in the Asian Division's Japanese Collection. A systematic effort to acquire Japanese books was undertaken in 1907 when Dr. Kanichirō Asakawa of Yale University purchased 9,072 volumes (over 3,000 titles) of books in Japan on behalf of the library. Asakawa's selections included works on Japanese history, literature, Buddhism, Shinto, geography, music and the arts. In the 1930s, Dr. Shiro Sakamata developed the collection into a first-rate resource for scholars, tripling its size. Today, rare books in the Japanese Collection include the <i>Hyakumantō</i> (thousand prayer charms, which date to 770 A.D. and are among the earliest surviving printed material in the world. Also noteworthy is a complete edition of the Japanese literary masterpiece <i>Genji Monogatari</i> , published in Kyoto in 1654, the <i>Yoshitane Asakura</i> (sutra) monogatari, printed on movable type between 1624 and 1643, and the <i>Kakuki Sugawara</i> , written by the kabuki actor Nakano Natsumura in 1776. The collection includes materials in almost all subjects. The major subjects include history, military science, Buddhism, medicine, and geography.

北米日本古典籍所蔵機関ディレクトリ (<http://base1.nijl.ac.jp/~overseas/>)
米国議会図書館のページ (部分)

国文学研究資料館創立 40 周年 特別展示「鴨長明とその時代—『方丈記』 800 年記念」

平成 24 (2012) 年は鴨長明が『方丈記』を書いて 800 年を記念する年です。長明は平安時代から鎌倉時代へ、貴族から武士へと転換する激動の時代を生き抜いた文人で、都から少し離れた日野という土地に方丈の庵を結び、そこで世の中の変動を客観的に眺めて、人はいかに生きるべきかを叙述しました。それが『方丈記』です。「行く川の流れるは絶えずして、しかももとの水にあらず」ではじまるこの作品は、古典の教科書にも載せられることから、一度は目にしたことがあるでしょう。長明は歌人としても著名で、『新古今和歌集』に和歌が選ばれ、『無名抄』という歌論も書いています。また、『発心集』という説話集を編むなど、多彩な文芸活動を行いました。

期せずして今年の大河ドラマは「平清盛」ですが、清盛と長明が生きた時代は重なります。この時期は、源平の争乱が続いて世の中は乱れ、竜巻と大地震という天変地異に襲われた時代でもありました。混沌とした政治経済や天災に対する不安を抱えた世相は、現代にも通じると言えましょう。

国文学研究資料館では今年が『方丈記』執筆 800 年になるのを記念して、「鴨長明とその時代」をテーマに特別展示を行います。そのために、昨年から特定研究「大福光寺本「方丈記」を中心とした鴨長明作品の文献学的研究」(研究代表者:成蹊大学教授・浅見和彦)を立ち上げて、共同研究を推進するとともに、展示の準備をしてきました。その研究成果をもとに、『方丈記』を中心に長明に関する文物約 50 点を展示し、長明の人間像と生き方にせまります。この展示を通して、激動の時代をいかに生きるかのヒントを得られたら幸いです。(小林健二)

展示の概要は以下のとおりです。

■期 間 平成24年5月25日(金)から6月23日(土)まで

※ただし、日・月曜日は休室

■会 場 国文学研究資料館 展示室

■入場無料

主な展示(予定)品を次に紹介します。

○個人蔵(八幡市立松花堂美術館寄託) 伝松花堂昭乗筆「先賢図押絵貼屏風」

昭乗は江戸初期を代表する文化人。長明の姿が他の歌人とともに描かれる。

○財団法人前田育徳会尊経閣文庫蔵 「方丈記」

「方丈記」諸本のなかでも屈指の古写本。

○法界寺蔵 鴨長明座像

数少ない長明の木像。

○国文学研究資料館蔵 「嵯峨本 方丈記」

江戸初期に刊行された装飾性に富んだ版本。

○国文学研究資料館蔵(川瀬一馬旧蔵) 「方丈記」

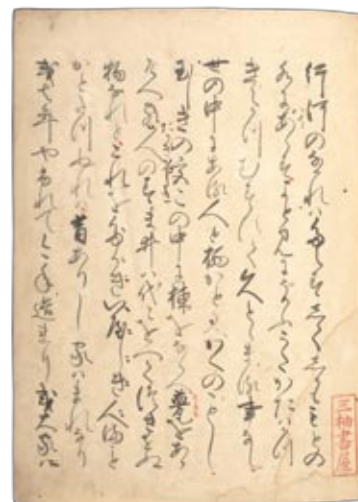
書誌学者として高名な川瀬一馬氏が旧蔵していた写本。

○個人蔵(国文学研究資料館寄託山鹿積徳堂文庫) 「発心集」

「発心集」の伝本の中で異本として貴重な写本。

○県立神奈川近代文学館蔵 堀田善衛「方丈記私記」自筆原稿

初版本「方丈記私記」と並べて展示の予定。



国文学研究資料館蔵「方丈記」
(川瀬一馬旧蔵)

平成24年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会通算第58回）の開催

1. 趣 旨

国文学研究資料館では、アーカイブズ（記録史料）の収集・整理・保存・利用等に関する最新の専門的知識、及び技能の普及を目的として、アーカイブズ・カレッジを開催しています。

2. 期 間

A. 長期コース（東京会場）国文学研究資料館

前期＝平成24年7月17日（火）～平成24年8月10日（金）19日間

後期＝平成24年8月27日（月）～平成24年9月21日（金）19日間

B. 短期コース（福井会場）福井県文書館

平成24年11月13日（火）～平成24年11月22日（木）10日間

3. 申込資格

次のいずれかに該当する方です。

- （1）文書館などの歴史資料保存利用機関をはじめとして、官公署・大学・企業等の文書担当部局及び歴史編纂部局、又はアーカイブズを取り扱う必要のあるその他の機関に勤務し、アーカイブズの収集・整理・保存・利用等の業務に従事している者。
- （2）大学院在学中又は大学卒業以上の学歴を有する人で、アーカイブズ学に強い関心を持つ者。

4. 受講料

無料（ただし、テキスト代は受講者負担〔500円〕）。

5. その他

申込書、及び詳しい情報等については当館Webページ（<http://www.nijl.ac.jp/>）をご覧ください。か、管理部総務課企画広報係（TEL (050) 5533-2910）までご連絡下さい。

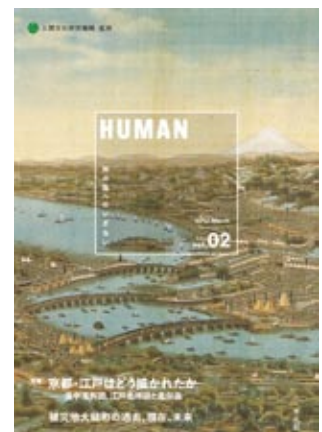


文書修復の実習

『HUMAN——知の森へのいざない』 第2号

国文学研究資料館が所属している人間文化研究機構が監修する研究・情報誌『HUMAN——知の森へのいざない』第2号が刊行されました（3月14日平凡社刊、定価1500円＋税）。

当館と国立歴史民俗博物館との連携展示「都市を描く——京都と江戸」とタイアップして、「京都・江戸はどう描かれたか——洛中洛外図、江戸名所図と風俗画」を特集し、当館の大高洋司教授が「十九世紀江戸の職人尽絵」を、同井田太郎助教（4月より近畿大学准教授）が「江戸の風景をめぐる心理学」を執筆しています。両館が協同して続けてきた「都市風俗画研究会」の成果であり、近世文学を取り巻く環境を目で見ながら感じ、考えていただける内容です。



総研大日本文学研究専攻の近況

■学位授与

3月23日に総合研究大学院大学葉山キャンパスにおいて、学位記授与式が行われた。国文学研究資料館を基盤機関とする日本文学研究専攻に所属する、2名の課程博士修了者に学位記が授与された。

- ・張 培華（論文題目「枕草子における漢文学受容の可能性」）
- ・陳 可冉（論文題目「林家の漢詩文と近世前期の俳諧」）

これにより、日本文学研究専攻からの学位取得者は11名となった。

昨年12月に一次審査が行われ、今年1月に公開発表会と二次審査が行われて、晴れて合格と認められた。これが2月24日の文化科学研究科教授会において認められ、正式に学位授与が決定された。

■入学者選抜

平成24年度春からの入学者の募集を行った。12月の受付期間中に6名の出願があった。修士論文やこれまでの研究論文などの出願書類に基づき、論文審査（第一次審査）を実施し、4名を合格とした。続く、第二次審査では、入学者選抜委員会を中心に面接が行われ、日本文学研究専攻で研究指導を受けるにふさわしい学力を身につけているかが判定され、2名が合格し、入学することとなった。

研究者を目指すならば、今や博士の学位は必須となった。日本文学研究専攻では価値高い博士を排出するべく、カリキュラムを整えており、意欲ある新入生の入学を心からお待ちしている。



学位記授与式



総研大学長から学位記授与



記念写真撮影



指導教員と修了生

5月						
日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

6月						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

7月						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

★4月から平日の開館時間が9:30～18:00になりました。御注意ください。

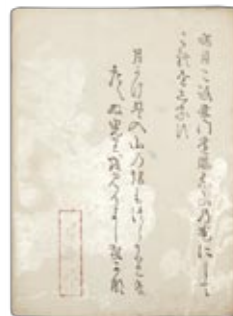
- 開館 9:30～18:00 ● 請求受付 9:30～12:00,13:00～17:00 ● 複写受付 9:30～16:00
- ただし、土曜開館日は、
- 開館 9:30～17:00 ● 請求受付 9:30～12:00,13:00～16:00 ● 複写受付 9:30～15:00

表紙絵資料紹介

〔嵯峨本方丈記〕（当館蔵）

新収。縦二五・三糎×横一八・七糎の大本、列帖装一帖。雲母引唐草十字印樺水色表紙原装。外題はない（あるいは当初から具備しなかったか）。全三〇丁。每半葉九行、一行の字詰めは一五字前後。字高二・六糎（本文初行）。内題なし。〔慶長中〕刊（無刊記）。西荘文庫旧蔵。上蓋裏面と下箱底面の二か所に「友金」と墨書された、古桐箱入り。

本書は、連続活字を使用した古活字版。雁皮紙を貼り合わせたやや厚めの料紙には下絵雲母摺りが施され、表裏両面に本阿弥光悦流の書体を模刻する。肥瘦に富んだげざやかな書風はひととき美しく、流麗闊達な版面は雲母摺りの下絵と相俟って思わずため息が出るほどだ。保存状態も上々で、その美術工芸的な装飾的意匠はまさに嵯峨本中の優品と断じて憚らない。下絵は、睡蓮・梅が枝・笹竹・高松・紅葉・兎・山端の満月ほか多種に及ぶ。料紙のゆえか、版面は全体にややかすれた薄めの印象だが、それがかえって温雅の美を醸し出している。（神作研一）



巻末



表紙



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3

Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成 24 年 (2012) 5 月 11 日

編集 国文学研究資料館広報出版室

印刷 株式会社アズディップ

©人間文化研究機構国文学研究資料館